

ハインリヒ・ハイネ

はしがき

(115) ハインリヒ・ハイネ

ハイネの「人と学説」を紹介するという作業に、私は一種のとまどいを感じる。詩人ハイネに体系的な学説のあろうはずはないから「学説」に関してはかなり無責任な態度でのぞむとしても、作品を通じてハイネの「人となり」を正しく伝える義務は免れない。ところが、彼の著作にせよ、人となりにせよ、なかなか一筋なわけでは行かぬしろものである。生前ハイネは友人たちから「ドイツのアリストファーン」の称号を与えられたが、どの角度から彼を紹介しようとして、イローニッシュな彼の微笑を防ぐことはできそうにない。それを思うと背筋が寒くなる。しかし、不十分なハイネ紹介に対する草葉の蔭

宮野悦義

からの彼の皮肉な微笑、これは程度の差こそあれ、すべてのハイネ研究者に背負わされた宿命のようなものだ。ゲーテの作品を悠々と流れ行く大河にたとえるなら、ハイネのそれは岩を噛む急流である。ゲーテの作品が連続的な内面の対話を思わせるのに反し、ハイネのそれは断片的、情熱的な会話を思わせる。もちろん、両者の個人的資質の差もあるのだが、同時に両者の時代的環境の差も考慮に入れねばならない。特にハイネの場合、彼の生きた時代、一九世紀の前半のヨーロッパ、とりわけ七月革命から二月革命に至る時期のドイツとフランスの状況をぬきにして、この特異な現象を理解することはできないであろう。彼の周囲には当時のさまざまな対立が渦をまいていっている。そしてそれが、生れながらにして被圧迫民族

ユダヤの血を引くハイネの上に、極めて複雑な影を落しているのである。こうした事情に妨げられ、ハイネの総合的理解はまだまだ今後の課題である。ドイツ本国ですら満足に行く全集の刊行されていない現状が、そのなにより証拠であろう。

以下、ハイネの作品からのいくつかの引用を中心に、この「ヨーロッパ的事件(ニーチュ)」にさまざまな角度から照明をあててみよう。あえて断片的な紹介の形をとるのは、ハイネの辛辣な微笑を意識するからではなく、いまのところ、もっとも適切なハイネ紹介の形式だと考えられるからである。

一

「いつかわたしの棺が月桂冠によって飾られるに値するかどうか、わたしにはもちろんわからない。詩は、わたしがどれほど愛していたにせよ、わたしにとってはずねに神聖な玩具か、あるいは天国めあての聖なる手段にすぎなかった。わたしは詩人としての名声の上にはけっして大きな価値をおかなかった。そして君たちがわたしの歌をほめようとけなそうと、そんな

ことはどうでもいい。だが、君たちはわたしの棺の上に一振りの剣を置かねばならない。なぜなら、わたしは人類解放の戦いにのぞんだ勇敢な一兵士なのだから。」

(Reise von München nach Genua. 1828)

ハイネの名を一躍世界的なものに高めた初期の詩集「歌の本(Buch der Lieder. 1827)」をさておいて、「旅の絵(Reisebilder. 1826—1830)」の一節の引用から始めることに、ある種のうしろめたさを感じる。しかし、ほとんど無数といえる「ハイネ抒情詩集」の氾濫を考えれば、これも許されるであろう。この、いわば大見得を切ったような文章には、単なるハイネ流の誇張にとどまらぬ多くの真実が秘められている。もちろん詩人としての名声に無頓着ではなかったし、彼自身が晩年には「ドイツでわたしほどに若くして月桂冠をかち得たものはいない(Geständnisse. 1854)」と書いてはいるのだが、そうした矛盾撞着の一切を考慮に入れた上でもなお、彼の中には一滴の保守性もなかったといえる。

ハイネを「人類解放の戦士」たらしめた決定的な要因

は、ユダヤ人としての彼の出生と関聯している。「ユダヤ人であること」、フランス革命後の一時期解放の喜びを味わい、やがて一八一五年以降の反動化の時代にまた元の悲惨に追いやられた「ドイツのユダヤ人であること」が、彼の思想形成にどれほど暗い影を落したことだろう。終生変わることのない「自由・解放」の理念へのいわば殉教者的情熱は、すでにその揺籃の中に芽生えていたのである。しかし、彼を純粹な意味でのユダヤ主義者と考へてはならない。彼はユダヤ教徒解放のためにたかいかいもし、ベルリン大学時代には「ユダヤ人文化學術協会」の活動にも積極的に参加した。だが、彼は早くから「ユダヤ問題」を広い視野でとらえている。彼にとつてそれはもはやユダヤ教とキリスト教の問題ではなく、一つの政治的・社会的問題である。そして、ユダヤ人の政治的・社会的解放は、むしろドイツそのものの改革によつてのみ解決をみる「ドイツ的課題」なのである。彼が幼いとき、フランス支配下のデュッセルドルフの町で肌で感じた自由平等の理念、フランス革命の指導理念を彼が念頭においていたことは明白である。しかし、当時のドイツから市民革命の可能性を汲みとることはできな

い。「すべてのドイツ的なものがわたしには厭わしい。残念なことにきみはドイツ人だ。ドイツ的なものはすべて吐き気をもよおす。ドイツ語がわたしの耳を引き裂く。自分で書いた詩ですらも、それがドイツ語で書かれているのを見ると吐き気をもよおすことがある。」と、彼は一八二二年に友人に書き送っている。「ドイツ語という水から跳び出したら干あがって乾魚になる」ことを百も承知のドイツの詩人の、惨めなドイツの現状に対する呪詛の声であろう。このようなハイネの反ユダヤ主義に対する闘争の発展、また、ナポレオン軍を破って国粹主義的傾向の強化されたドイツに対する罵倒は、必然的に彼を孤立させた。一八二五年の彼のプロテスタントへの改宗は、更にいっそうその周囲の誤解を招く。

君は十字架に向つて這つていった

君が軽蔑していた十字架に、

ほんの数週間前、君が

芥の中にふみにじろうとしていた十字架に！

(Bienen Abtrünnigen)

「ユダヤ人文化協会」の指導者ガンスの改宗にこううたったハイネが、「ヨーロッパ文化の入場券」を得るためと称して同じ道を歩むことになったのであるから、風当りは強かった。この改宗は彼の心の上に大きなしこりを残している。「ユダヤ教徒からもキリスト教徒からも憎まれる」結果を招来した、と彼は友人に悲痛な手紙を送っている。だが、この行為が彼を本当の意味での「あらゆる既成宗教の敵」にし、彼をヨーロッパ的視野をもつ革命思想家の地位におし上げたのである。それはつぎのような文にも明白である。

「だが、われわれの時代の最大の課題とはなにか。

それは解放である。ただ単に、アイルランド人、ギリシヤ人、フランクフルトのユダヤ人、西インドの黒人、その他の被圧迫民族の解放ばかりでなく、全世界の解放である。とくにヨーロッパの解放である。今やヨーロッパは成年に達し、そしてここに特権者の鉄のくびきから自己を振り切るのである。：

「あらゆる時代がそれぞれの問題を持っている。これまでの不平等は、封建制度によってヨーロッパに樹

立されたものであり、おそらく文明の進歩にとって必要、あるいは必要な条件だったのである。しかし今はこの不平等が文明を阻害し、開化した人心を激昂させている。社交の国民であるフランス人を、この社交の原理と激しく衝突する不平等が、もっとも深刻に憤激させたのは当然だった。彼らは平等を勝ち得るため、あくまで人の上に高くとまろうとする人の首をあっさり切りすてた。そして革命は人類解放のためのシグナルとなった。

「後世の読者よ、笑い給うな。いずれの時代も、自分らの戦いこそもっとも重要なのだと信じている。これが時代の本当の信仰であり、この信仰の中で時代は生き、そして死ぬ。そしてわれわれもこの自由宗教の中で生き、死にたいと思う。この自由宗教こそは遙かに宗教の名にふさわしい。」

(Reise von München nach Genua)

一八二四年ごろからのヨーロッパ各地への旅が彼の社会的視野を広げ、彼はいつそうラディカルになる。当然のことながらその過激な発言にはさまざまな干渉が加えら

れ、やがて一八三一年、ハイネは七月革命後のパリに追われるように旅出つのである。

二

この岩の上にわれわれは

第三の教会を建てよう、

第三の新しい福音の教会を。

悩みはもう終つたのだ。

わたしたちを長い間まどわせた

あの二元論は滅びたのだ。

おろかしい肉体の苦しみは

ついに終つたのだ。

きみは暗い海の中に神の音が聞えるか？

神は無数の声で語っている。

きみはわたしたちの頭の上の

無数の神の光が見えるか？

聖なる神はいます、

光の中にも、また闇の中にも。
神は存在するすべてのものだ。
神はわたしたちのキスの中にもいる。

(Verschiedene. 1832—1839)

一八三一年七月、ハイネはパリに移る。七月革命の陽光はすでに薄れていたが、自由の天地を得たハイネは、「水を得た魚」のようだと友人に書き送っている。彼はパリ到着とほとんど同時に、空想的社会主義者サン・シモンの弟子たちの一派、つまりサン・シモン派のひとつと交渉をもった。しかし、彼らの経済理論の方には「人間の人間による搾取」という言葉を借用した程度でさして関心を示さず、もっぱら彼らの宗教論に耳を傾けたのである。前項の終りに「自由宗教」という彼の言葉があったが、プロテスタント改宗後の悲劇的状況は、彼の既成宗教に対する態度を硬化させた。と同時に、それは宗教のもつ本来的な意味を彼に考えさせる機縁ともなった。彼は「自由・解放」という闘争の合言葉に、もう一つ「新しい宗教」を加えている。改宗後のハイネが、なんらかの意味での宗教的な慰めを求めた、といえない

こともない。だがむしろ、彼は自分の強力な批判活動を支えるポジティブなもの、精神的な支柱を求めたとみるべきだろう。彼は宗教を歴史的に、各時代を支える指導理念だと考える。現在が「病める分裂の時代」であるのは、新時代の胎動が始まっているにもかかわらず、いぜんとして中世的理念にキリスト教の支配下にあつて、新時代にふさわしい理念の確立がまだできていないためだ、とハイネは理解している。もともと彼の変革への期待は、ほとんど彼の主観的要請の域を出ていないから、それは世界観の変革にとどまりがちである。そして結局は第三の福音という形で、人類の宗教的過去に宗教的未來を対置することになってしまう。中世的理念の克服というネガティブな活動に終始している限り、彼は極めて強力だった。たとえば彼はこうのべている。

「暗黒時代には諸国民を導くには宗教がいちばん良かった。それというのも、暗闇の中では盲がもっともすぐれた案内役で、目あきよりはずっと確かだからである。ところが、昼が来て明るくなったのにお盲に案内させるとすれば、それは阿呆である。」

(Gedanken und Einfälle)

また政治・社会面でも、同様のことがいえる。七月革命に關聯して、彼は次のように記している。

「わたしは今日、『貴族』という言葉が生れの貴族を意味するばかりではなく、どんな名前でもよばれようと民衆を犠牲にして生きている連中のすべてをも意味するのだ、ということを理解しました。」

(Vorwort zur 1. französischen Ausgabe der Reisebilder. 1834)

ところがこの文のすぐあとで、彼はこうのべる。

「僧侶階級に対するわれわれの昔の戦いの合言葉は、すでもっとよいスローガンに置きかえられたのです。もはや重要なのは古い教会を力強く破壊することではなく、新しい教会を建てることなのです。僧侶階級を絶滅しようというのではなく、われわれはいま自ら僧侶にならうと考えているのです。」

フランスではすでに否定の時代は終わった、ここではポジティブな活動が始められねばならない。ハイネによれば、そのポジティブな活動は新しい教会、サン・シモン教の僧侶となって布教につとめることなのである。ルイ・フィリップ王政下のバリの観察を通じて、彼はすでに第四の階級の擡頭を予言していたはずであり、「所有の貴族」との対決をも予言していたはずである。このずれをはっきりとさせるために、彼の新しい宗教の内容に入る必要がある。

ハイネはユダヤ教とキリスト教とを「ナザレ」的宗教として一括し、その本質を唯心的な禁欲主義だと規定する。これに対するものは古代の神々の享樂主義、古代の異教的現世主義である。そしてこの両者から、「キリスト教があゝの世で約束したものをこの地上で実現する」宗教、汎神論にもとづく「神々の民主主義国家」を地上に建設せんとする宗教を導びく。サン・シモン派のひとびとの「物質の復権」という感覚論にも影響されて、彼はつぎのようにならべている。

「人類はキリストの肉といわれる聖餐のパンなどにあきはてている。人類はもっとほんとのたべ物が、ほんものパンやりっぱな肉がほしくてたまらないのだ。」「だから、これからのあたらしい社会制度の目的は物質つまり肉にもとの権利をとりもどしてやること、物質つまり肉にもとの品位をあたえてやること、物質を道徳的に承認し、宗教的に神聖なものとし、物質を精神つまりたましいと和解させることである。」

(Zur Geschichte der Religion und Philosophie
in Deutschland. 1834)

この新しい宗教は、ハイネによれば、地上の天国を説く。なぜなら、神は世界と同一だからである。神はすべてにあらわれる。しかし人間にもっともはつきりとあらわれる。神は人間に自覚され、そしてこの自覚がまた人間によって表現される。自分が神であるという自覚は、その自覚を表現させるべく人間をふるいたたせるであろう。そのときこそ、真の英雄たちの偉大な行為が地球をりっぱなものにするであろう。ハイネにとって革命とはこの自意識の表現なのである。未来に「同じようになりっぱな、

同じように神聖な、同じように幸福な神々の民主主義国家」を描きつつ彼はこう歌っている。

新しい歌、よりよい歌を、

おお友よ、きみたちを作ってあげよう

ぼくらはこの地上できつと

天国をつくりだそう。

ぼくらは地上で幸福になろう。

もう飢えるのはごめんだ。

勤勉な手が稼いだものを

怠けものの腹に飽食させてはならない。

この地上にはすべての人の子のために

十分なパンができるのだ。

バラもミルテも美も楽しみも

甘えんどうも同じことだ。

そうだ、さやがはじけりゃ

甘えんどうはみんなのものだ。

天国なんかは

雀や天使にまかせておこう。

(Deutschland. Ein Wintermärchen. 1843)

ハイネの描く人類の未来図が、汎神論的な神のヴェールをはぎとれば、社会主義的なものであることは明白だ。もちろん彼はそのヴェールをもち上げはしないし、むしろ、それにしがみついているような感もある。神々の民主主義がどのような方法で確立されるのかについても、彼の答はない。第三の教会の建設、世界観の変革が、ほとんど無媒介に現実となるかのようにである。そして、ここに彼のラディカリズムの原因がある。いずれにせよ、まだ否定の時代の終っていないドイツに対しては、この汎神論的宗教はなお有力な武器となり得た。しかし、革命劇の第一幕を終え、まもなく第二幕が始まるうとしていたフランス、彼自身が「持たざる者と所有の貴族の大血闘」と予言した第二幕のフランスでは、「デモニーッシュな歴史の必然」の前に、彼の神々の民主主義国家のイメージがもろくも崩れ去るのである。

三

「アッタ・トロル、傾向的熊なり、
道徳的・宗教的、妻に対して肉欲旺ん。

時流の思想に誘惑されし

山出しのサンキュロット。

踊りは、すこぶる拙劣なれど

毛深き胸に高邁なる思想を抱く。

またしばしば悪臭を放つことあり、

才能はなけれど、節操あり！」

(Atta Troll. 1841)

一八四〇年前後の数年は、不幸なハイネの生涯の中
もとりわけ不幸な時期であった。それは、ハイネと同じ
くユダヤの血を受け、同じように祖国ドイツの反動勢力
と戦った在パリのかつての同志、ベルネとの確執のため
である。急進的な共和主義者で、ハイネにいわせれば小
児病的な冒険主義の俗物だったベルネと、広い社会的視
野、豊かな芸術的感覚の持主だったハイネとのあいだに

は、いつしか深い溝ができていた。特にハイネが我慢で
きなかつたのは、ベルネの「ナザレ的性向」であり、政
治的主義主張をもってこと足れりとする狭量だった。更
に、このベルネの周囲に集まる政治的傾向詩人の、傾向
の名で新しい文学を語る俗物根性にも、彼は心の底から
怒りをおぼえたのである。もちろんベルネの方は「才能
はあるが節操のない詩人」として、ハイネを背信の徒と
きめつけていた。一八三七年、ベルネは五十一歳でパリ
に客死する。しかし、「無節操」の刻印を押されたハイネ
は、自らの汚名をそそぐべく、一八四〇年にベルネ批判
の書を発表、ありとあらゆる悪口雑言をならべたため、
「屍に鞭うつもの」との世人の糾弾を受けるのである。
更に翌年、彼は長編叙事詩「アッタ・トロル」を書き、
残る傾向詩人たちに鋒先を向ける。ハイネの攻撃の鋭さ
は定評があるのだが、この詩の痛烈な諷刺や嘲笑は他に
例をみない。一八四六年に書かれた序文で、彼はこの作
品の意図にふれてこういつている。

「当時、いわゆる政治詩が流行していました。『反
政府派がその皮を売って文学となった』のです。ミュ

ーズが、今後は気ままに遊びまわることをやめ、自由を売る酒保の女将かキリスト教ゲルマン民族の国民性を洗う洗濯女になって祖国のために奉仕せよ、との厳命を受けたのです。：

「あのころは才能というものがまことに不都合なものとされてきました。才能が無節操という疑いを受けていたのです。嫉妬ぶかい無能力者は幾千年も考えたあげく、とうとう自信ある天才に対し強力な武器を発見しました。つまり、才能と人物というアンチテーゼを発見したのです。へたな音楽家は、一般にはむろん律義ものにきまっていますが、反対に、上手な音楽家は律義ものなんかじゃありません。ところが、世の中で大切なのは律義であって音楽ではない、こんな主張を聞くといいていの人はひとりいい気になったのです。」

ハイネが詩人として「傾向の名による美の凌辱」に抗議したのは正当な行為だったといえよう。しかし、およそ中庸という言葉に縁のない彼は、攻撃に際し有効と思われるものはすべて、ためらうことなく用いている。この

作品でいえば、彼が数年前に徹底的に批判した「浪漫派の気まぐれな夢」の手法を、彼は遠慮なく利用し、「美的価値を犠牲にした」とさえ述べているのである。ここでもまた、ハイネの「否定する精神」の強さを感じずにはいられない。更に注目したいのは、過去の遺物に対する批判よりも、未来を騙る安易な妥協の産物に対する彼の嘲笑の方が、幾層倍も強烈だということである。もちろんそれはハイネ自身が新しい時代の新しい芸術を求めて苦しんでいたためにほかならない。

文学史についての彼の考え方の根拠は、「芸術時代の終り」という言葉に集約される。パリ到着直後に訪れた美術展覧会の印象として、彼はつぎのようにのべている。

「ゲーテの揺籃に始まり、その枢に終るであろう芸術時代の終焉についてのわたしのかつての予言は、実に近づいているように思われる。現在の芸術は、その原理が古い体制、すなわち神聖ローマ帝国の過去に根をはやしているのです、滅び去らねばならない。この芸術はそのため過去の枯れ果てたすべての残骸と同じく、現代ともっとも不愉快な矛盾をきたしている。

そして、芸術にとってきわめて有害なのは、この矛盾であって時代の動きではない。：

「しかし、新しい時代は新しい芸術を生むであろう。その芸術は新しい時代そのものとよく調和し、色あせた過去からその象徴を借りる必要もなく、今までの手法とは異なった新しい手法さえも生み出すにちがいない。」

(Gemäldeausstellung in Paris. 1831)

この新しい芸術の展望は、前にふれた彼の社会的・政治的展望と対応している。したがってここでも、彼の活動の主力は過去の芸術の批判、ドイツ古典主義とロマン主義批判にそそがれる。しかし、この場合の抵抗は強かった。社会的・政治的領域ではたえず辛酸をなめさせられた被圧民族の一人だったハイネが、芸術の分野では若くして月桂冠をかち得た光栄ある詩人の一人だからである。彼自身が所属し、そこで育った古き時代の克服が、そこで培われた豊かな教養、詩人としての彼自身の存在の基盤を揺がすものとなって彼の眼に映るため、彼自身の内部で葛藤が起きるからである。彼は再三にわたって

勇敢な前進と恥ずべき後退をくりかえしている。けれども、新しい時代への彼の社会的・政治的展望が失われなにかぎり、したがっては新しい芸術の将来が期待できなかがり、彼は自己の内部にひそむ過去を大胆に止揚することができたのである。ハイネの抒情詩にみられる浪漫的幻想の意識的破壊、奔放に官能を歌った中期の詩、あるいは辛辣な諷刺詩などが、それを示してくれる。

さて、このようなハイネの立場は、当然のことながら周囲の誤解を招いた。古いものに対する批判、それにもまして痛烈だった進歩主義の愚劣な歪曲に対する批判は、必然的に彼を孤立させたからである。事実ハイネは孤独な詩人だった。初期の「歌の本」のころから晩年にいたるまで、彼は周囲の世界の無理解と、いな、ときには自分自身ともたたかわねばならなかったのである。

ハイネの孤独はゲーテのそれとは異なっている。ゲーテの場合その孤独感は若い頃の政治的実践の失敗と、自己の理想と当時のドイツの現実との大きなずれの認識ともとづく「諦念」から来ている。いわば荒野にそびえる一本の巨木のような優越の感情である。ゲーテは時代に埋没することを拒否し、美的仮象の国にいてこそ、人

類の未来の壮大なタブローを展開できたのである。一方、ハイネの場合は進んで時代の荒浪に身を投じている。彼のユダヤの血統、ゲーテとは対象的に彼に一生つきまとった貧困などが、彼を当初から時代と密着させ、そして彼の闘争的な性格を養っている。その後も、われわれが見て来たとおり、彼の周囲にはたえず事件があり、闘争があり、人の離合集散がある。彼の時代はもはや芸術の国をうち立てることを許さない。ゲーテにみられる真摯な自然研究が彼の心をとらえることもない。彼が愛した唯一の自然は北海の海だが、彼の「北海」という詩集には、やはり生の人間の声が響いてくる。ともあれ、時代と共に生き、さまざまな出来事のまっただなかにあって、彼は孤独を噛みしめているのである。

同じユダヤ人でも、ベルネはドイツの急進的共和主義者の陣営に属し、マルクスにも階級的基盤があつて、その党派と共に発展することが可能であつた。しかし、ハイネの場合はまったく孤立している。その原因の一つは、彼の個人的資質によるものでもあろうが、他方、ひとり最前線にあるという自負も手伝っている。そして彼は時折その孤独に堪えかねて、わずかな共感にしがみつこ

うとする。もちろん、自ら全幅の信頼をおいているわけでもないこの共感という幻想を、ついには自らの手で大胆に破壊せざるをえない。もちろんその結果は、よりいっそうの孤立を招くものであつた。前述のベルネの場合もそうだ。フランス移住当時のサン・シモンズムも、晩年、病床のハイネの遊び相手となつたえたいの知れぬ神も、すべてこうしたハイネの「友人」なのである。

しょんぼり空を見上げると

幾千という星がまたたいていた――

だがぼく自身の星は

どこにも見あたらない。

きつと天上の黄金の迷宮に

まぎれこんでしまったのだろう。

ぼく自身がこの地上の雑踏に

まよいこんでいるように――

(Jetzt wohin?)

四

「わたしは自分の幸福だった時代に崇拜していたやさしい偶像から袂を分つたのは、一八四八年の五月、私が最後に外出した日のことであった。やっとの思いでわたしはルーヴルまで足を引きずって行った。そして、この上なくお恵み深き美の女神、わが愛するミロの女が台座の上に立っているあの立派な広間に入るや、わたしはほとんど身もくずおれんばかりだった。わたしは長いあいだ女神の足もとに身を横たえ、石も哭けとばかり、さめざめと泣いた。すると女神も同情してわたしを見おろしていたが、情けなさそうな顔でこういつているようでもあった。お分りにならないの、わたしには腕がないんですもの、どうすることもできませんわ。」

(Nachwort zum Romanzero. 1851)

晩年のハイネは悲惨の一語につきる。ハイネはもともと健康な方ではなかったが、一八四〇年代の半ばごろから眼疾、半身麻痺といった持病が急速に悪化し、一八四

八年には誤って詩人の訃報が出されるほどにまで進行した。そして五月のこのルーヴル訪問を最後に一八五六年までの八年の歳月を「褥の墓穴」のなかで過すことになるのである。

この時期のハイネのもう一つの問題は、宗教的退歩である。むしろ、彼の世界観の崩壊といってもよい。一八三〇年代、彼がサン・シモニズムの理論の助けを借りて打ちたてた「同じようになりっぱで、同じように高貴で、同じように幸福な神々の民主主義国家」という人類の未来図が、「デモーニッシュな必然」である二月革命の現実の前に、はかなく消えるのである。更に、「褥の墓穴」での病苦は「物質の復権」というかつての合言葉を空しいものにした。ハイネ自身は、宗教的退歩が自らの神性の崩壊の結果生じて来て、「迷信」であるところの人格神へ復帰したのだ、と述べるにとどまり、政治的後退の方は否定している。むしろ、年少の頃から信奉してきた民主的原理には忠実だった、とさえ言っている。だが、はたしてそうであろうか。たとえば「ベルネ論」の中で彼はつぎのように書いている。

「あわれな民衆！ あわれな犬！

すでに昔からある話した。大昔から、民衆が血を流して苦しんだのは、自分自身のためではない。自分のためではなく、他の人間のためなのだ。一八三〇年七月、民衆が勝利を戦い取ったのは、ほかならぬブルジョアジーのためだった。貴族と同様に役たつたブルジョアジーが同じエゴイズムをもって貴族にかわっただけだ。……民衆は勝つたのに、その結果は後悔とあっさり大きな困窮とを得ただけなのだ。しかし確信したまえ、もし再び警鐘が鳴らされ、民衆が銃をとるようになれば、今度こそ民衆は自分自身のために戦い、正当な報酬を要求するのだ」

この文を晩年の「告白」の中のつぎのような文と比較してみよう。

「寛大な主義の潮にさらわれて、われわれ芸術家や科学者はわれわれの芸術や科学の利益を、そうだ、すべての特殊な利益を、悩める抑圧された民衆の全体的利益のために犠牲にするであろう。だが、あるいは民

衆と呼ばれあるいは賤民と呼ばれ、その正当な独裁権がすでにずっと前に宣言されているこの偉大な、粗野な大衆が実際に支配権をにぎったとき、われわれが何を予期せねばならぬかを、われわれは決してかくすことができない。特に詩人は、この不作法な帝王の即位に無気味な恐怖を感じる。われわれは喜んで民衆のために犠牲になりたい。なぜなら自己犠牲は、われわれのもっとも洗練された楽しみの一つだからだ。民衆の解放はわれわれの終生の偉大な課題だ。われわれはそのためにも戦い、故国においても流謫の地においても、いい知れぬ苦勞に堪えて来た——だが、詩人の純潔な、繊細な性質は、民衆とのいかなる個人的接触にも反撥する。そのうえなお、彼らの愛撫を考えるとわれわれは戦慄する。神よ、彼らの愛撫からわれわれを守り給え。」

この二つの文の差、すくなくともハイネの姿勢の差異は明白である。一八四〇年前のハイネの「あわれな民衆」への共感が、一八五四年には消えてしまっている。後の引用では、大衆支配に対する恐怖感が、自己犠牲と

いう冷やかな表現によって、かえって強い印象を与える。ここでは熱っぽい共感に代って傍観者の苦い顔がぞいでいる。

彼の絶望は更に芸術の領域にもおよび、いな、むしろこの点にもっとも重要な鍵があるといえる。前に彼の新しい文学・芸術への期待が、彼の社会的・政治的展望に対応していることを指摘した。しかし、「神々の民主主義」の現実の姿に、彼はむしろ美の破壊者を見ている。避け難い歴史的必然としての労働者階級の勝利を予見しつつ、と同時にそれを美の破壊・文化の没落として把えざるを得なかったところに、彼の晩年の大きな悲劇がある。それを当時の労働運動の素朴な禁欲主義のせいにすることは易しい。しかし、「古代の喜びと快楽の復活」、「神々の民主主義」、「ネクタール、アンブロジーア、高価な香料」等々——もちろん多くの誇張があるとはいえ、——の言葉が、この時代を超えられなかった彼の限界を示してはいないだろうか。

幕は下りた。芝居ははねた。

そして紳士淑女は家路につく。

(Sie erlischt)

これでハイネの一生の「幕は下りた」のだろうか。決してそうではない。この時期の多くのハイネの詩にくりかえされるように、「シャボン玉」^{シャボン玉}は確かに破裂してしまつた。しかし、これまでのハイネをハイネたらしめたものは、「シャボン玉」でもなければ「幻」^{フアンタム}でもない。むしろ、あらゆる分野のあらゆる不正、虚偽、愚劣に対する痛烈な批判にこそハイネの真骨頂があつたのではなかつたか。彼を支える一切のものが「幻」と消えたいま彼を生につなぐものはこの不正、虚偽、愚劣に対するデモニッシュな憎悪であり、呪詛である。それらのすべてを、彼は晩年の詩の中に叩きつけている。

どうやら命も終りらしい、

遺言状でも書くとしよう。

これでもおれはキリスト教徒、

おれの敵にも遺産をやろう。

尊敬すべきごりっぱな

敵の諸君に遺ってやろう。

おれのすべての悪疾病毒

四百四病の長病ながぢりいを。

遺産の品は、釘抜きのように

はらわたをよじる痲痛と、

小便づまりと、たちの悪い

ブロンヤもどきの痔やまいの病。

遺産の品は体のふるえ、

よだれの流れと手足のしびれ、

背骨の髓のやけただれ、

みんな素敵すてきな賜物ばかり。

遺言状追伸。

神のお慈悲で

てめえらの

悔みなんぞ まっぴらだ。

(Testament)

この詩の「敵」の正体は不明である。遺産問題でひと悶着あった親戚に向けられたものではないかと思われるが、はっきりしたことは分らない。いずれにせよ、敵と、自らの病状に対するこの上なく凄惨な呪詛の声である。このような状況にあっては、彼の「復帰した」と称する人格神も、単なる玩具の域を出ない。彼はその神を自ら「迷信」と呼んでいる。そして、その自ら信じてもない神へのとりすがりが、悲劇トラジコメディー的な笑いとなる。

おお、主よ！ わたしをこの世においてくださるのがいちばんよいのだと思います。

その前にまずわたしの病気をなおし、

いくらかお金の世話をしてください。

この世が罪と悪徳に満ちていることを

わたしは知っています。でも、

わたしは苦難の谷を通過して

このアスファルトの道を歩くのになれています。

……

主よ、健康とお金の添えものを

お願いいたします！

どうぞ今のままで、妻のところにて

なおたくさんのよい日を楽しく送らせてください。

(Zum Lazarus)

ときには自然を歌うこともある。もちろん「褥の墓穴」の詩人を美しい五月の花や鳥が慰めることはできない。むしろ彼の心の中の暗黒との対照を残酷に示すにすぎない。彼は美しい春を厭い、生を拒んで死への憧れを歌う。

春たけなわ、緑の森に

鳥の楽しい歌がひびく。

そして少女と花はういういしくほほえむ―

おお、美しい世界よ、おまえが厭わしい。

だからわたしは死の国を讃える

そこでは意地悪な対照が心を傷つたりしない

悩める心にとって

死の国の河辺の方がはるかにいい。

(Im Mai)

ハイネはどこにも希望が見出せず、死以外に出口のなかったこの「褥の墓穴」の八年間を、精いっぱい生きぬいた。僅か四時間の睡眠をとるためにも、三様に調査されたモルヒネを飲まねばならなかったほどのこの上なく痛ましい苦悩の中で、健康な時代の詩集のどれよりもすぐれた作品を、彼は懸命に書きつづけたのである。二、三すでに紹介したように、生への憧れ、死の讚美、痛烈な呪詛、空しい幻との絶望的な戯れ、そればかりか、ギリシャ、ユダヤの歴史を題材にしたかなり長い作品を含め、実にさまざまな世界がくりひろげられる。更に「告白」や「回想」といった、ハイネ研究にかかせない自伝的作品も、この間に書かれている。病床のハイネにこれほどまでの活動を強いたのは、またしても貧困であった。「まず健康と金を」という先に引用した詩は、こうした背景を考慮に入れるとき、この時期のハイネのイローニッシュな微笑が、言語に絶する悲劇性をはらんでいることを教えてくれる。しかし、生活のために数をこなすといった類のものでないことはいうまでもない。ハイネの

詩の口述筆記をした秘書のカール・ヒレブランドは、病にもめげず作品の彫琢に精魂を傾ける詩人ハイネの様子を、つぎのようにのべている。

「眠られぬ夜な夜な、彼はすばらしい詩を作った。

詩集『ロマンツェロー』の全作品を、彼はわたしに口述筆記させた。詩はいつも朝にはすっかりできあがっていた。しかしそれから推敲が始まり、それは数時間つづいた。その際わたしは砥石の役に立った。つまり、モリエールがルイゾンの無学を利用したように、ハイネはわたしの若さを利用して、音声、音の抑揚、明瞭さについてわたしに尋ねたのである。その折、更に動詞の現在や過去が一つ一つ入念に吟味され、古めかし

い普通用いられない語は一つ一つ正当かどうかを検討され、音節の省略が一つ一つ除去され、無用な形容詞は一つ一つ削除され、諸所で粗略なところに訂正が加えられた。」

(Karl Hillebrand: Heine, Gespräche)

「樽の墓穴」のハイネは、まさにデーモンと化している。他の一切の心の支えを失って詩の世界に慰めを見出したというより、詩作は彼にとって、それによってわずかに自己の生が確認される、やむにやまれぬ血みどろの戦いだったのではないだろうか。

一八五六年二月、彼は五十八歳でこの世を去った。

(一橋大学助教授)